

# ああ、相談業務

～ 由佳さんの話 ～

かうんせりんぐるうむ かかし

19

河岸由里子（公認心理師/臨床心理士）

子どもの相談を受けていると、子どもの問題より保護者の問題が大きいということも多々ある。今回はそのような話をさせていただく。

## 家族

由佳さんの家は母子家庭で、長男17歳、長女15歳、次男13歳、次女11歳の5人家族。父親は由佳さんに対するDVで離婚していた。また、長男は、由佳さんとの関係が悪く、実母のところへ預かってもらっている。実母は再婚していて、継父と由佳さんとの関係は悪くはない。由佳さんには優秀な弟が一人いて地方に住んでいる。

由佳さんは、働きながら子育てをしているが、子どもたちにはそれぞれ発達の問題が見られた。

相談にいらしたのは次男のことだったが、長男にもADHD、長女及び次女にもADHDやASDの傾向が見られた。ただ、次男が一番重症ではあった。

## 相談経過

由佳さんと最初に出会ったのは、由佳さんの次男さんの発達障害の相談であった。次男さんについては、知能は高く、学校の勉強で困ることは全くなく、サッカーが好きでクラブチームで頑張っていた。ADHDとアスペルガー症候群の診断があり、忘れ物が多く、母親があれこれ細かく手を出す状態で、本人の自立を考えるとやりすぎ感があったので、対応についての助言をしながら、息

子さんと母親との関係などを先の見通しを主体に伝えたりしていた。そんな中、医療から、カウンセリングの対象を由佳さんでお願いしたいと連絡がきた。と言うのも、由佳さんの解離状態が激しく、薬だけではどうにも上手くいかないからとのことであった。

由佳さんは小柄で、痩せ気味の方で、運送会社の事務職をされていた。彼氏がいて、時々彼氏との喧嘩があってその度に解離症状が激しく出現したが、また仲直りしてと、結局離れずに過ごしていたが、最終的には彼氏彼女の関係は清算し、友達として付き合うようになった。カウンセリングにも彼が連れてきてくれたし、彼が、彼女の様子を教えてくれたりした。

由佳さん自身も自閉症スペクトラム障害とADHDの診断を受けていて、投薬も受けていた。解離性同一性障害との診断もついて、ストレスが高くなると由佳さん自ら入院を希望し、病院に入院したりということもあった。

由佳さんとのカウンセリングを始めて、家族について聞いたときに、「母親の自分への対応がとても嫌だった」と語った。子どもの頃、由佳さんは余りひらひらした服を着るのは嫌だし、ピンク色などの服も嫌だったのに、母親の好みでひらひらした服やピンク色の服を着せられた。また、父親からは殴る蹴るの虐待を受けていたという。性的虐待を受けていたかについては、否定も肯定もせず、わからないとの答えだった。おそらく何かしらあったのではと推測された。そういうバックグラウンドを持っていたからこそ、解離が起きたのだらうと推察した。

由佳さんは元夫のDVをきっかけに解離症状が悪化し、人格が4人出現するようになった。

一人は、幼い小学校低学年の子「あや」、一人は高校生の子「かおり」、一人は男の人格「たつや」、もう一人は少し年上の女性「まちこ」である。

「あや」は色々なことをお話ししてくれる子で、由佳さんが孤独感を感じる時に出現したように思う。よく「一人で寂しい」とか「お父さん怖い

よ、痛いよ」と訴えていた。「かおり」は、由佳さんの精神状態が落ち気味な時に出てきて、元気をアピールしてきた。スポーツが得意な子で、勉強は数学が得意だと話していた。学校の成績は良いほうだが、友達関係は悪いそうだ。「たつや」は乱暴者で、由佳さんが彼氏や実母と喧嘩した時や、職場で理不尽な思いをしたとき、つまり怒りを感じた時などに出てきて、乱暴な運転をしたり、首を絞めて死のうとしたりする。最後の「まちこ」はおっとりした、常識的なお大人の女性で、多くは「たつや」が何かした後に出てきて、事態の収拾を図る役割を担っているようだった。由佳さん本人には自覚はなく、人格交代するときは一瞬寝落ちする感じであった。従ってそれぞれがどのようなことをしていたかを由佳さんは把握していなかった。これらの人格の把握は、それぞれの人格が、付き添ってくれている彼にメールを送っていて、その様子を彼の方から筆者に伝えてくれたからできたのである。

由佳さんとの話し合いの中で人格統合を図っていった。「あや」「かおり」「まちこ」は比較的スムーズに統合することができたのだが、とにかく「たつや」が収まらず、職場で嫌なことがあるとひどい言動があり、職場にいられなくなってやめ、次の職場に行っても、対人面でもめると「たつや」が出て滅茶苦茶なことをしてしまうのでまたいられなくなるということを何回か繰り返していた。仕事を続けるのが難しい状態の時に、ある福祉施設から声がかかり、そこの事務職を担うことになった。もともと数字には強く、パソコンを使うことにも慣れていたので、そこではとても重宝されて、由佳さん自身も気持ちよく仕事をすることができ、しばらくは「たつや」も収まっていた。

ところがその職場に、意地悪な女性職員が入ったことから、関係性が悪化、由佳さんが再び自殺企図を繰り返すようになった。「たつや」は、「由佳を殺してやる」「由佳はダメなやつだ。こんな奴はいなくなった方が良い」と訴えた。筆者が「由佳さんが死んだらあなたも死ぬよ」と「たつや」

に伝えるが「それでもかまわない。とにかく殺す」と言い張った。その頃から、由佳は「由佳でなくなりたい。名前を変えれば生きていける」と訴えるようになった。自分自身を否定し、生まれ変わりたいという思いが強くなってきたのである。

主治医ともいろいろ相談しながら進めてきたが、名前を変えることで本当に自殺企図がなくなるのかと言う話し合いをした結果、名前を変える申請を家庭裁判所に出してみることとなった。医師と筆者の双方から意見書を提出することになり、それぞれが書いて由佳さんが裁判所に持っていった。「由佳さんはどんな名前にしたいの?」と聞くと「咲奈<sup>きな</sup>」にしたいという。その名前にしたい理由はと聞くと「かきくけが入らない名前の方が優しい感じがするから」だそうだ。

医師とは、そう簡単に認めてくれないかもしれないと話していて、由佳さんにもそう伝えていたが、結果的に名前の変更は認められ、由佳さんは咲奈さんに改名した。

その後、仕事は辞め、生活保護を受けるようにし、ストレスがかからないようにしたこともあって、自殺企図はなくなった。彼の方にも「たつや」から怒りのメールが届くことも無くなった。面談で人格交代が起こることも無くなった。

子どもたちは成長し、長男は高校を卒業し大学に進学、長女は地元の高校に進学し、卒業後は看護学校へ進んだ。次男は中学でも勉強に困らないため地元高校へ進学。特別に配慮を受けながらも常にトップの成績を保っている。次女も中学校に進学し、普通学級で頑張っている。

## まとめ

改名を希望される方は時々いる。親との関係が悪く、早く自分の名字を変えたいから結婚したいという女性もいた。今回は名字ではなく下の名前なので、変えることに対して、家庭裁判所はさほど問題なく許可してくれた。勿論医師の意見書もあったからだろう。名前を変えるだけで、状態が

良くなるというのであれば、それはやってみる価値がある。根本解決になるかは定かではない。おそらく、咲奈さんの中には、(由佳さん)が残っているのではないかと思う。今のところ安定しているので出てきてはいないが、何かストレスがかかればきっと出てくるだろう。ただ、「たつや」だけが大人しくしてくれていればということになる。「たつや」はメールの中で、由佳さんを守ってほしい、守ってくれないのかという訴えを彼に何度も繰り返していた。由佳さんは、彼との関係を元のような関係に戻したかったのかもしれないが、今の関係の方が安定していて良いと感じた。彼も優しい人なので。

こんな風に、人格解離を起こしている保護者のもとで育つ子どもは大変である。急に変わってしまう母親をどう受け止めるのか。ある意味、この子たちに発達の問題があって、気持ちの切り替えが上手な子や、自分の趣味興味に没頭できる子など、特性が功を奏して、子どもたちの状態が悪くなることは無かったのはよかった。何が幸いするかはわからないが、どんな中でもプラスのことと言うのはある。それを考えながら家族支援をしていると、新たな気づきや学びがあるものだ。